

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2016.12) 平成28年度:45-46.

看護師と看護学生の乳がん予防行動の知識と影響要因について

赤澤 春香, 角田 萌, 地家 優美子

看護師と看護学生の乳がん予防行動の知識と影響要因について

赤澤春香 角田萌 地家優美子
(指導：伊藤俊弘)

緒言

わが国において乳がんは女性のがん罹患の第1位を占め、30歳代以上のすべての年代に乳がん罹患率の増加が認められている¹⁾。また、女性の乳がん罹患率が20代後半から急増するとの報告もあることから²⁾、比較的若い時期から乳がんに対する意識を高めることが重要であると考えられる。

看護師は、医療従事者として女性の乳がん予防に対する十分な知識を有して患者等に接するだけでなく、自己の予防行動に対しても積極的に取り組むことで意識の向上に寄与する。さらに、乳がんに関する知識の獲得や自己の予防行動は学生のうちから行っておく必要があると考えられるが、看護学生や若い看護師の乳がんに対する自己の予防行動の意識については明らかではない。

本研究では看護学生と看護師に乳がんの予防行動と予防に対する認識と学生時代に得た知識との関連性の調査を通して看護師と看護学生の乳がん予防行動に影響する知識の違いと要因を明らかにし、さらに学生と若い看護師の乳がんに対する自己管理能力の向上に寄与する具体的な指導の方向性を見出すことを目的とした。

方法

研究対象

A大学の医学部看護学科の女子学生1~4年生とA大病院の勤務経験が4年以内の女性看護師を対象とした。

調査方法

無記名自記式質問紙によるアンケート調査を行った。学生には調査者が直接説明・調査票の配布し、看護師には病院の看護管理者に研究内容を説明し、承諾を得たうえで病棟師長に調査票の配布を依頼し、回収した。

調査内容

調査票の質問内容は以下のとおりである。①対象者の属性、②乳がんの教育を受けた経験の有無、③健康診断・乳がん検診の受診状況、④自己健診の経験・頻度・方法、⑤乳がんに関する知識、⑥乳がん検診の不利益、⑦対象者のストレス状況

統計解析

学生と看護師の乳がんに対する知識の差は χ^2 検定を用いた。学生の学年別、看護師の経験年数別の比較にはKruskal Wallis検定、2群間の比較にはMann-WhitneyのU検定を用いた。自己健診行動に対する学年(または経験年数)と各知識の得点の関連性についてはロジスティック回帰分析を用いて検討した。各検定の有意水準は5%とした。

倫理的配慮

調査は、旭川医科大学の倫理審査委員会の承認を得て行った(承認番号16066)。研究の目的、調査票の記入・提出をもって本研究の同意を得たものとし、研究への参加は自由意思、匿名性の確保、学内の研究発表会にて研究結果を公表する旨

を文書及び口頭(看護師は病棟師長より)にて説明した。

結果

1. 対象者の基本属性

調査票を400部配布し(学生206部、看護師194部)、262名から回答を得た(回収率65.5%)。そのうち年齢の記載のないもの、無回答の項目があるものを解析の対象から除外した(表1 有効回答数243名、有効回答率60.8%)。

表1 有効回答者の内訳(n=243)

学生(平均年齢19.9歳)		看護師(平均年齢23.5歳)	
第1学年	54(36.4%)	1年目	30(31.6%)
第2学年	31(21.0%)	2年目	29(30.5%)
第3学年	30(20.3%)	3年目	21(22.1%)
第4学年	33(22.3%)	4年目	15(15.8%)
計	148(100%)	計	95(100%)

2. 知識と乳がん予防行動(乳がん検診・自己健診)の関連

乳がんの知識(26点満点)は、平均点が学生の8.53点に対し、看護師が12.7点と有意に高得点であった($p<0.001$)。乳がん予防行動の割合は表2の結果となった。

表2 乳がん予防行動の有無

	乳がん検診		自己健診	
	学生	4名/128名(2.7%)	16名/148名(10.8%)	
看護師	14名/95名(14.7%)	32名/95名(33.7%)		
全体	18名/243名(7.4%)	48名/243名(19.8%)		

乳がん検診受診の有無による乳がんに対する知識の得点は、学生・看護師ともすべての項目で差を認めなかったが、全対象者では、検診経験者は「乳がんリスク」と「知識の合計」で高得点を示した。自己健診の有無では、学生はすべての項目で差を認めず、看護師も自己健診なしが「予防行動」で高得点の傾向を示した($p=0.080$)。全対象者では、自己健診ありが3項目(自己健診、リスクおよび合計)で高得点を示した。学生を学年間で比較すると、乳がんの知識は、3,4年生は全ての項目で1,2年生よりも高得点であった($p<0.05$)。(図1)

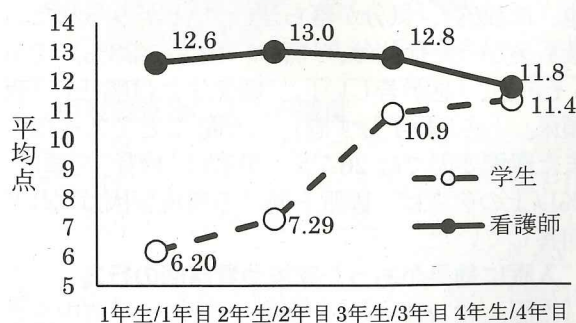


図1 在籍年数と乳がんの予防知識(得点)

次いで自己健診行動を従属変数、学年と各知識得点を独立変数に投入してロジスティック回帰分析を行った。その結果、学年では1年生に対するオッズ比が2年生4.35倍($p=0.24$)、3年生21.3

表3 在籍年数別乳がんの予防行動

学年	学生		年数	看護師	
	乳がん 検診	自己健診**		乳がん [△] 検診	自己健診
1	3.70	1.90	1	6.70	36.7
2	3.20	6.50	2	10.3	24.1
3	0.00	20.0	3	19.0	38.1
4	3.00	21.2	4	33.3	40.0

単位：(%)

△：p<0.1, **：p<0.01

倍(p=0.010)、4年生19.2倍(p=0.012)となり、3,4年生は乳がん自己健診を実施する者が多いことが示された。乳がんの知識では「検診方法の知識がある者」のオッズ比が0.559倍(p=0.063)と小さくなる傾向を認めたが、その他の項目では差は見られなかった。一方、乳がん検診は、経験者が4名と少数であったため検定は行えなかった。

次に看護師を経験年数別に比較すると、乳がんの知識に差は見られなかった。乳がん検診行動はKruskal Wallis 検定では差は見られなかったが(p<0.095)、傾向性検定では経験年数の増加とともに受診者も増加することが示された(p=0.020)。一方、自己健診行動では、経験年数による差は認めなかった。以上の結果から、看護師は経験年数とともに乳がん検診の受診者が増加することが明らかになった。

3. 周囲の乳がん罹患者の存在と行動の関連

周囲に乳がんの罹患者がいる者は、243名中39名で、そのうち乳がん検診の受診者は4名(10.3%)であった。また、周囲に乳がん罹患者はいないが、乳がん検診の受診経験がある者は204名中14名(6.86%)であった。乳がん患者の存在と乳がん検診の受診との間に有意な関連性はみられなかった。周囲に乳がん罹患者がおり、かつ自己健診を実施した者は39名中10名(25.64%)であった。また、周囲に乳がん罹患者はいないが、自己健診を実施した者は204名中38名(18.62%)であった。乳がん患者の存在と自己健診実施の有無についても関連性はみられなかった。

4. 乳がん検診の不利益と受診意思

不利益があっても乳がん検診を受診する意思がある者は、学生は148名中73名(49.3%)、看護師は95名中48名(50.5%)であった。

考察

1. 学生と看護師の知識と乳がん予防行動の関連

学生と看護師は、いずれも知識と乳がん予防行動との間に関連を認めなかったが、全対象者では、乳がんの予防行動を実施している者は知識の得点が高いことが示された。この理由を明らかにするために、学生と看護師に対しそれぞれ在籍年数毎に乳がん検診の知識と予防行動を比較した。乳がん検診に対する知識は、学生では2年生と3年生の間に明らかな差を認めたが、看護師では経験年数による違いは見られなかった。学生については、1,2年生に比べて3,4年生では乳がんの知識が増えるという波崎らの研究結果と一致していた¹⁾。

学生の乳がん予防行動について、自己健診を実施する者の割合が学年とともに増加していたが、この理由は、乳がんに対する知識の増加も要因の一つになっていると考えられた。自己健診は、そ

の方法を理解していれば道具も必要なく自宅で行える手軽さから知識と行動の結果に関連が見られたものと考ええる。一方、看護師は経験年数が増加しても知識得点に差はみられず、自己健診者の割合も差は示されなかった。しかし、乳がん予防行動においては、経験年数が上がるにつれて乳がん検診を受診するという傾向が見られたことから、経験年数が進むほど乳がんリスクを意識する者の割合が増加するものと考えられた。以上のことから、看護師は年齢が上がり好発年齢に近づくとともに、経済的・時間的・精神的なゆとりができることから自己の健康管理に関心を向けることができると考えられた。

2. 周囲の乳がん罹患者の存在と行動の関連

周囲の乳がん罹患者の存在により乳がんに対する予防意識が高まるのではないかという仮説をたてたが、乳がん予防行動との間に関連性は確認できなかった。本研究では、周囲の乳がん罹患者の存在が必ずしも本人の予防行動に繋がらないことが示された。しかし周囲の乳がん罹患者の続柄の中には、母親や祖母、叔母などの親族が含まれており、このような身近な存在から体験談を聞くことは乳がん予防への関心を強める要因になり得る。以上のことから、家族間で乳がん予防の重要性について話す機会を積極的に設け、周囲に乳がん罹患者の存在がない者でも体験談を聴く機会として経験者の講演を設けるなどの試みが必要であると考えられる。

3. 乳がん検診の不利益と受診意思

乳がん検診時に不利益があっても乳がん検診の受診する意思がある者は約半数いることが示された。その一方でわからないと回答した者も約半数おり、乳がん検診に対する迷いや興味・関心の薄い者は行動のイメージ化ができていないことがあると推測された。これらの対策として乳がん教育を継続し、乳がん予防行動のイメージを具体化することが重要である。また、学生や経験年数の浅い看護師は、乳がん好発年齢に差し掛かっていないため実感できていないことも考えられ、年齢に応じた教育方法も必要であると考えられる。

4. 研究の限界

本研究の限界は、横断調査のため結果の適用範囲が限られている。また、調査の対象病院や施設が限定されるため結果を普遍化出来ないことである。これらについては、対象範囲を広げて研究を継続する必要がある。

謝辞

本研究にあたり、ご理解、ご協力いただいた学生・看護師の皆様、並びにご指導頂いた先生方に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 波崎由美子, 田邊美智子, 佐々木綾子 (2014): 母親と娘の乳がんに関する知識・意識, 伝達の実態—医療系・非医療系女子大学生とその母親の比較—, 福井大学医学部研究雑誌, 第14巻第1号
- 2) 日下知子, 渡邊有紀 (2011): 青年後期女性の乳房自己検診行動を妨げる要因—看護学生を対象として—, 川崎医療短期大学紀要, 31号, 15~20
- 3) TBS ピンクリボンプロジェクト:
<http://www.tbs.co.jp/pink-ribbon/data/>